

---

# 下剋上姫

度辺 彩番

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

下剋上姫

### 【Nコード】

N6738Z

### 【作者名】

度辺 彩番

### 【あらすじ】

不登校だった姫野歴亜。だがテストの日いきなり登校を開始する。歴亜の『戦部門』のテストは生徒同士での戦い。『戦部門』で最下位の歴亜のテストと同時に姫野歴亜の下剋上が始まる!!!

下剋上の始まりだッ！！

アタシ姫野歴亜は今日テストの日から登校を開始する。

廊下に貼つてある白いテープを無視して木でできた古くもろいドアを蹴りあける。ドアは大きな音を立て粉碎した。生徒は「お前誰？」  
似たいな顔でアタシを見ている。

「姫野か？」

「はい。そうですが、何か文句ありますか？でもあっても無くても口は開かないください。口臭いです。」

「なっ！」

自分の席に座ると顔を伏せる。

「今日はテストだ。この『戦部門』は生徒同士の戦いだ。さあ、全員自分の装備を持って私についてきなさい。」

口開くなと言ったのに。

アタシは自分の装備品日本刀を持っていく。

そしてあの口が臭い先生についていく。

あの先生加齢臭もすごいぜ。

会場に着くとみんなあわただしく動き出す。

アタシも自分に用意された椅子に座る。

そして放送部による放送がかかる。

『みなさん着席してください。これより戦部門のテストを始めます。まず教頭先生ルール説明をお願いします。』

校長じゃないんだ。

『これからルール説明を行います。よく聞きましょう。まずテストは生徒の対一です。どちらかがギブアップした時点でテスト終了となります。武器は一人3つまで。他の人が手出した場合した者は即退学です。これでルール説明を終わります。』

『教頭先生有難うございました。次に前回の第一位の敬原強瀬さんに意気込みをお聞きします。お願いします。』

へー。そいつが前回の一位か…。

『強瀬だ。意気込みの前に宣戦布告させてもらう。おい今日いきなりきた姫野歴亜、お前をぶったおす。ドア壊すなっこの処理する係俺なんだよね。無いと思っただからこの係にしたって言うのによ！もうこれ自体が意気込みだ！決勝戦で待つ！！』  
自業自得だろ。まあ、少し楽しみだ。

『有難うございました。では一回戦を開始します。姫野歴亜さんと河野可憐さんスタジアムへ来てください。』  
このテストと同時にアタシの下剋上の始まりだ。

## 一回戦〜竹切りの舞〜

『ここで生徒紹介をします。まず、前回5位の河野可憐さん。彼女の武器は鎌のようですね。接近戦が得意のようです。』

放送部の紹介って結構参考になる。

まあ自分の情報も漏れるんだけどね。

けどアタシは今まで不登校あまり情報が無いはず。

これはラッキーだ。

『次に姫野歴亜さん。彼女は今日まで1度も登校してきていません。なので今回のテストで実力が分かります。』

これはいいハンデをもらった。けど全力は出さずに行こう。これで少しは情報が漏れてしまうからね

「へーハンデもらいすぎ！ツて感じ？まあ可憐に問題なし！！よし！小野！！」

可憐とかいう人がそう言うとお上から鎌が可憐の真ん前に降ってきた。なんで！？

「なんでって顔ね。今可憐に鎌を渡してくれたのは」

今のは渡したって言わないって。

「可憐のいところ。ちなみ可憐の使い。美人で可愛いんだから。」

使いつて…。

「まあいいわ。始めましょう。」

ピーーッ！！と開始の笛が鳴る。

それと同時に相手が目の前から消える。

「さっさとかたずけてあげる。感謝してね？歴亜ちゃん？」

相手はアタシの真上。思いつきり鎌を振ってくる。

鎌の動きが鈍い。これくらいなら受け止められる。

自分の日本刀で受ける。

「驚いた！歴亜ちゃんやるじゃん。けど可憐は負けないよ？」

「ちゃんを付けるな気持ち悪い。」

あ…。本音でちゃった。

「へー。可憐本人前にそんなこと言っちゃっていいの？可憐本当に本気出しちゃったよ？」

「ああ。さっさと本気を出せ。」

そういつた瞬間相手はうつむいた。

「俺は負けないよ？あはは？」

こいつ多重人格かッ！

相手はそつと顔を上げる。少し強気な顔になっている。

「ポーツとしてつと負けるぜ？」

ブンブン鎌を振りまわしてくる。

きつと適当に振り回してるせいかどう来るか予想ができない。

「ほらほら。」

どうしようか。後ろに回るか。

「後ろから攻撃する気？あまいよ！」

思考を読まれていたか。

「じゃあ。技を出すのみ！」

「へー。楽しみ！さあ！」

「貫け日本刀技『竹切り舞』ッ！」

竹を切る素振りですまず強力な風をおおこす。それを何度か繰り返すしやる。

「なに！？日本刀使いのクラシクの技だと！最下位のお前がなぜ使える！」

「なぜ…？はは。」

それは…

「負けたくないって強い意志かな？」

思いつきり日本刀を相手に向かって竹を切るように振る。

日本刀は相手の体に。

「そうついうことが。わかったような気がするよ。可憐の負けギブアップだよ。」

審判から笛の合図が出る。

一回戦はアタシの勝ちだ。

## 二回戦く絶対に負けたくない

『なんと一回戦は未経験者姫野歴亜の勝ち！！これは期待できます。』

『これで負けたら下剋上も何も無いからな。』

『次の歴亜さんの対戦相手が決まりました。』

ちなみにテストはこのホールだけが会場ではなく学校全体を使って行われているらしい。

だから次々対戦しなければならぬ。

『次の対戦相手は北山レイさんです。』

よし行くか。

『北山レイさんは前回ワーストランク2位。歴亜さんがいなかった  
ので今回の戦いは分かりませんね。北山さんがさっき勝ったのは5  
0位。下剋上と言うに相応しい戦いでした。』

下剋上ね…

『でわ二回戦開始です！』

ピーーーーッ！と笛が鳴る。

「貴方が歴亜さん…」

なんかじつと見てくる。

「何か用？早くおわらせるわよ？」

「はい。負けません。覚悟してください。僕はこのテストで下剋上  
をします。ここで負けたりはしません。」

「そうか。あいにくアタシもだ。だから負ける気ない。」

相手の武器はチェーンソー。また接近戦になりそうだ。

「いきますッ！！」

こっちに全力で向かってきている。

「光れ！そして力を与えよ『シャインストーンズ』ッ！！」

チェーンソーから大きな光る石が出てそれをチェーンソー砕きそれ  
がこっちに向かってくる。







## 保健室にて

『第二回戦勝つたのは姫野歴亜さんです。そして次の対戦相手はレイン・イページさんです』

外人か。

まあ、戦う前に治療に行かなきゃな…

さっきのでかなり傷を負ったから。

「歴亜さん！！」

後ろを向くとさっき戦っていた北山レイの姿があった。

「レイさん？なんだ？」

「さんなんて付けないでください。レイでいいですよ。歴亜さんこれから保健室行くんでしょう？ずっと学校来ていないから分からないでしょ？僕が案内しますよ。僕もさっきので行かなきゃいけませんから。」

「ああ。サンキュ。」

レイと一緒に保健室に向かう。

「歴亜さん。なんであんなに強いんですか？」

「じゃあレイはどうなんだ？」

「え？僕ですか？毎日の特訓でしょうか。毎日父に付き合ってもらいましたから。父は意外とチェインソーの使い方うまくて。『シャインストーンズ』も父から教えてもらいました。」

話を聞くだけで特訓の情景が浮かんでくる。

毎日だもんな。それだけ今回のテストに賭けていたのだから。

「で、歴亜さんは？」

「そうだな。まあこのテストが終わったら教えてやる。」

「えー！！僕言つたのに！！」

「まあ楽しみに待ってる。」

レイは少し不満そうにうなずいた。

「あ、あと歴亜さんの次の対戦相手ですが僕戦ったことがありま

すよ。たしか…レイン・イページさんでしたっけ？この前の一回戦で戦ったんですよ。武器は二丁拳銃。いまでは最強ガンナーと言われていきます。本気になるると巨大なものを使ってくるだとか。あっ、ここが保健室です。」

「そうか。」

最強のガンナー…。

「あら、レイちゃんと…」

「姫野歴亜です。」

「歴亜ちゃん。どうしたの？」

この人が保健室の先生か。

「さっきので怪我してしまいました。それできました。相川先生」

「よーし！じゃあ手当てるわ。歴亜さんはあそこの無表情のうさ耳してる子にでもらって？」

「はい。」

相川先生の指したほうには言ったとうりの無表情でうさ耳の子がいた。

「あの。お願いできます？」

するとゆっくりこつちを見て

「承知しました…。」

ロボットかッ！

「『リカバリ』…。」

ちなみにこの学校は戦部門のほかに魔法部門、ほか5つの部門があるらしい。

いまの『リカバリ』は回復魔法のはずだ。

「回復完了しました…。」

「えと…」

「まだ何か？」

「できれば名前を…」

「相川…弾莉」

「ありがとうございます。」

相川つて保健室の先生と一緒にだ

「歴亜さん行きますよ。」

「ああ」

保健室にて（後書き）

弾莉は、はずり  
です！！

### 第三回戦〜回復の魔法と最強ガンナー〜

『ではこれより第三回戦を始めます。まずレイン・イページさん二丁拳銃を完璧に使いこなすことから最強のガンナーと言われます。ルックスの良さから女子からの人気が高いです。』

レイが言っていたとおりだ。

なんか女子からの人気が高い奴ってアタシの嫌いなタイプなんだよね（笑）

吐かなきゃいいけど…

「貴方が歴亜さんですね？私がレイン・イページです。宜しくお願ひします。」

やばい。マジで苦手だ。

周りの女子のキンキンした声がまたアタシを攻撃してくる。

「フフ。」

もう駄目だ。

「誰かエチケツト袋を…」

やばい意識が…

何処からか聞き覚えのある声が…

「小野！！」

上からエチケツト袋が降ってくる。

これは…

「可憐と小野さん有難う！！」

第一回戦で戦った可憐とその使い小野さんだ。

これで準備完了だ。

「私そこまできもいですか？フフ。」

「いちいち笑うな。きもくて仕方無い。」

このままだとテストに影響が出る。

「そうですね。ではさっさと終わらせて貴方を保健室送りにしまし  
よう。」

「言ってくれんじゃん。」

「でも貴方のような赤いバラのような方を散らしてしまうのは残念だ。」

『では開始ッ！！』

「いきますッ！！」

相手がそう言った瞬間周りからキンキンした声が飛び交う。

相手の動きはアタシに向けて何発も撃ってくるというぬるい攻撃。それくらいなら日本刀一つで防御が可能だ。

「なかなかやるな。じゃあこれはどうかな？」

子供に接するように話してくる。

これも超発して相手の思考回路を狂わせるためだろう。

女子相手ならこいつはアタシ見たいのでない限り負けないだろう。

だってあの自身だ。男子やアタシには効かない色仕掛けなんか…な

「舞い散れ『ブラックローズ』ッ！！」

銃口から出てきたのは黒いバラの花びらと…あれはとげ？

「終わりだよ。赤いバラのようなお嬢さん？」

誰が終わるか。

「花びらととげなんかで誰がダメージを食らうか」

普通に打たれるほうがいいだろ。

「果たしてどうかな？お嬢さん。油断はいけないよ？」

いきなり花びらととげの速度が上がりあちらこちらに飛び散る。

そういうことか。

普通に打つと一直線にしか行かないが花びらととげならばあちらこちらから攻撃ができる。

威力は小さいがそれがたくさん当たれば大ダメージだ。

「でも…アタシにも技はあるッ！！」

「ほう。」

「『竹切り舞』ッ！」

起こした風で花びらととげを吹き飛ばす。

「なにッ！！」



そしてすばやい動きで相手を切りつける。

相手の腹から鮮血が飛び出す。

そのばに膝をつく

「お嬢さん。私は負けませんよ？」

「え…？」

相手は傷のところに手を当てる。するとだんだん傷が治っていく。

これは見るところアタシが弾莉さんに治療してもらったときの魔法と同じだ。

なんで戦部門なのに魔法部門の魔法が使えるのだろう。

「私にはある人から魔法を教えてもらったことがある。魔力がない私にこの魔力の宿ったペンダントをくれた。それがこの魔法『リカバリ』。無表情でどこか寂しそうなうさ耳のお嬢さんからな。」

無表情なうさ耳少女…

「まさか…弾莉さん？」

「まさにそのとおりだ。」

どうしよう回復魔法使えるなんて。

攻撃しても効かないということだ。

「さあそろそろ終わりにしようか…」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6738z/>

---

下剋上姫

2011年12月29日12時52分発行